



ほっとほっとタイムズ—第6号—

2022.12.22

井萩小学校 校内委員会

毎日忙しく過ごしている間に、ふと気が付くともう2学期も終わろうとしています。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。記事を書こうと思ってから、あっという間に月日が流れてしまいましたが、あきらめず発行することにします。今日は「ことば」について考えてみたいと思います。

先日読んだ本の中に、少年院で働く方のお話が出ていました。ここに来る子供たちの多くは「ことば」をもたないというのです。何を聞いても「わからない」と答える。そして「死ね!」という。こうした言葉をもたない若者が増えているといえます。

では、どうするか。その少年院では丁寧に信頼関係を作り、感情にもいろいろな言葉があることを教えていくのだそうです。例えば、イラついたときは「死ね!」の一言だったところから、「むしゃくしゃする」「むくれる」「はらわたが煮えくり返る」「逆上」などなど、腹が立つ感情にも重い軽いがあることなどを教え、使えるようにする。それが使えるようになるとトラブルもうんと減るというのです。つまり、自分の怒りの度合いを自分で判断できるようになり、感情をコントロールできるようになるのです。

では、一般的には子供たちはどうやって言葉を覚えていくのでしょうか。それは、小さい時から家庭の中で絵本の読み聞かせをしてもらい、家族みんなで話し合うといった経験の積み重ねで基礎ができ、その基礎力を授業を通して一段上に引き上げています。けれど、その基礎力がない子が増えているといえます。国語の学習指導領には「言語による見方・考え方を働かせ、・正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する」とありますが、実は考えるのも想像するのも言葉を使うので、言葉のストックが少ないと国語の力もつかないのです。中学や高校の受験生が、「他の教科は勉強すると伸びるけど、国語だけはどうやって勉強すればよいのかわからない。」というのもうなづけます。「親が子どもに対して話しかける言葉の量と質が、経済力よりはるかに大きな影響を与えることがわかっている」という心理学者さえいます。

けれども、今の子供たちの置かれている状況はなかなか苦しいものがあります。本来、言葉のキャッチボールをする中で語彙を増やしたり想像力を磨いたりするのですが、大人も子どもも忙しく会話が少ないうえに（できるのは、食事中?お風呂で?寝るとき?くらいでしょうか）、ネット依存に近い子供たちがたくさん見受けられます。ネット上には荒れた言葉が氾濫しており、未熟なコミュニケーションがまかり通っている。また、ネットは密室なので、相手との距離感が存在せず、感情をそのまま言語化する傾向がある。しかも、その世界を親や教師は全く知ることができないでいる。怖いことです。

また、ある先生は、「子どもが言語を習得するものの一つに『遊び』がある。自発的な遊びの中でこそ、五感を使って言葉によって感性や興味を磨き上げていく。そこから物事の因果関係を考えたり、抽象的な概念をイメージできるようになったりし、徐々に心の中に『辞書』(心理的辞書)を形成する。この辞書を駆使することによって、言葉が操れるようになっていく」とおっしゃっています。ところが、そうした自発的な「遊び」の体験も、実はとても減ってきているのが現状です。

大人も子どもも忙しい毎日を過ごしています。難しいことはわかるのですが、家族でゆっくりおしゃべりをする、友達と元気いっぱい創造的な遊びをするなど、心(言葉)豊かな生活を過ごせるといいなあと思っています。子供たちが会話を楽しんでくれるのはそう長くありません。一緒に楽しめる間に豊かな時間を過ごしたいものですね。

もうすぐ冬休み。家族で過ごす時間も多いいと思います。たくさんしゃべって、たくさん聞いてあげて、心豊かな時間が過ごせますことを願っています。

